

光

明

「光明と云ふ事は私共の一心に念仏して信心を凝す時にミオヤの方より与へ賜はる不可思議の靈力である　また恩寵とも称へて実に如来は光明を以て一切衆生を摂化し給ふこと太陽の光明を以て世間のすべての生物を活かす作用の如くに如来の光明は人々の心霊を靈活せしめ給ふ能力である　其光明の存在に就いては実には理屈よりは念仏の実行によりて実感し得らるるのである」

「視給へ太陽はすべての生物を活かす処のエネルギーを放ちて止まぬ　弥陀は靈光を普ねく衆生の心霊に滌ぎて靈的の活気を与へ給うて居る」

無量光—法身

法身ほつしん大だいにして絶対無限ぜつたいむげん処ところとして在あらざる処ところなき故ゆゑに無量光むりやうくわうと名なづく。絶大ぜつだいなる宇宙うちゅう万物ばんぶつは各天則秩序おののくてをそくちつちよに随したがつて動うごかざるなし。天体てんたいの星宿せいしゆくより地上ちじやうの万物ばんぶつに至いたるまで天則そくの整然せいぜんたるを觀くわんずれば之これが秩序ちつじよの統一とういつの理性りしやうなかるべからず。此これが統一とういつの理性りしやうを法身ほつしんと名なづく。法ほふとは天則秩序てんそくちつちよの統一とういつの理性りしやうにして身しんとは宇宙うちゅうの実体じつたいなり。

実体じつたい本質ほんしつ—其本質そのほんしつは非物非心ひぶつひしんにして而しかも物心ぶつしんの一元理げんりなり。永恒えいごう自存じぞんの精神せいしん態たいなり。一理いつりの故ゆゑに真如しんによと名なづく。其量無限そのりやうむげん、徧空間へんくうかん、徧時間へんじかん、徧一切へんさいにして具德ぐとくより云いはば、無辺恒沙むへんごうじやの性德しやうとく含藏がんざうして欠かくることなし。故ゆゑに如来藏にょらいざうと名なづく。

宇宙万物うちゅうばんぶつは此法身藏性このほつしんざうしやうによりて生しやうじ、また之これに統一とういつ担保たんぽせられ、之これに離はなれたる一物ぶつあることなし。

天則秩序—衆生しゆじやうは此法身このほつしんを实体じつたいと為なすが故ゆゑに、此天則このてんそくに随したがつて動うごくべき理性りしやうを付ふせ

られたり。然れども衆生は無明によりて真に背き塵に向ひて自ら顛倒して流転す。之を顛倒世界及び衆生と名づく。帰趣の理性あることを覺らず。

帰趣の理——如来無量光即ち法身は自ら真理の体にして、また同時に衆生に真理に帰趣する規則を与ふ。此理性に随ふ時は塵に背き真に向つて正覺を成ず。

今無量光は帰趣の理性を明す光にして、此真理の光によりて自性天真顯はれて成仏す。此真理の光により理性即ち法身の軌に軌らずして正覺を成ずと云ふ理あることなし。三世諸仏此真理の光によりて成仏す。

宇宙は如来として觀する時は如実の真相にして自性天真純粹永恒不變絶対無比靈態至大至永の眞靈体之を無限の光と壽なりとなす。

一切諸仏一體に会する時は即ち絶対唯一の如来にして即ち現象の方面より無量諸仏なり。内面より觀する時は唯一體なり。阿弥陀とは諸仏の本体なり。

事理分別——事相は理性の表現。

宇宙実体の真理の体、絶対無限の光にして寿、永恒自存精神態即ち宇宙心靈態を理性と云ふ。此真理の靈性が事相に顕現する時は即ち觀經に説く処、六十万億の身八万四千相好光明遍く十方世界を照して念仏衆生を攝取して捨てたまはぬ事相莊嚴身また衆宝莊嚴の依報なり。此事相身全く絶対真理の顕現なり。理性を離れて事相なく事相と顕現するに非ざれば真理の実在と云ふにたらず。

無辺光——般若即ち一切慧

智慧相大にして普く法界に遍し、処として照さざるなきを無辺光と名づく。如来絶対心の属性なる写象一切慧は宇宙に周遍して照知せざるなし。宇宙の慧態は個人写象のごとく相待的に相互に写象するにあらず。虚徹靈明の写象本来周徧せり。信論に相大とは大智慧光明の義の故に徧照法界の義の故に真実識知の義の故にと。大とは宇宙遍満の義。如来の真知は意識的にあらず、自然智なり。宇宙物と心との万象は即ち如来

全智海の所現ならざるはなし。吾人の心象は絶対心の有識の個現に外ならず。
 如来の一切慧を四種に分つ。

大円鏡智

大とは宇宙に遍して円かなる絶対写象なり宇宙一切の万象即ち物心二象は悉く如来鏡智の所現なり。吾人の写象（自観の觀念）は絶対写象の分現なり。宇宙を全うして如来の大円智なる時は吾人心窓開く時は内外同く一切慧の光明なるを知る。天然的感覺的、唯識にはアラヤ識と云ふを超越して、絶対と致一したる写象を智と云ふ。

平等性智——理性

宇宙は全体絶対理性なり。衆生は（現象）感覺の方面より万物差別の相を識知す。故に彼我分別し物心二相を見、万物相待差別の方面のみを見る。天然を超へて本来自性の理体より自観する時は平等なり。理性自照の智、人心窓を開きて自性を観ずる時

は万法一如、物心不二、迷悟一体なるを觀る。

妙觀察智—智力

如來一切慧の内容に無尽の徳象ありて重々無尽なり。衆生三昧に入つて觀ずるときは種々の妙象顯現す。大乘教中に説く処は、法華三昧海中に現ずる靈山会上等また一切諸仏が仏事を現し、華嚴三昧の中に重々無尽の蓮華藏界を現じ乃至如來の神聖正義恩寵等の内容が本來宇宙心の如來の恩徳として存せり。これが衆生の心器に啓示として現じたるなり。若し宇宙心に斯の如きの徳象具有せざるに個人心に現すべき理あることなし。宇宙の内面には無尽の徳象具備せり。

成所作智—感覺（意志及感覺）

全宇宙が造化の妙用、万物を造作し天則によりて活動する妙用不可思議悉く如來藏性の作智の妙用に外ならず。吾人は現界の万物につきて作智の一片を知る。吾人の作智またその分たり。然れども賦与せられたる範圍内に作すのみ。心靈開きて靈に入る

時は、如来の作智靈界に於て五妙境界の微妙の感覺界に於て実に不可思議なる淨土の万物悉く如来作智の所作なるを識る時あらん。觀經等所説の淨土の莊嚴及び一切は是如来作智の所作なり。

理事分別。

理に約せば如来の一切慧は宇宙心の智慧態にして絶対写象なり。此写象によるが故に虚徹靈明にして万物互に相写象す。天体無數の星界は一微塵中に映現し無量の星界は人の脳裡に写象せらる。相互の写象より重々無尽論起る。其原は絶対写象なり。事相としては如来無量の相好身ありて四智円かに照し十力備さに具するは是また理性一切慧の顯現にして、理を離れたる事なく、事と現れざる理あることなし。

無碍光——絶対的道德的秩序

解脱の徳大にして妙用無碍、処として融化せざることなきを無碍光と名づく。宇宙

心たる如來の靈能は不可思議にして、衆生心を惡素質より解脱し聖靈同化する妙用あり。之を無碍光と名づく。

此妙用は絶対意志として無上道德態なり。此妙用は自己の目的に摂して靈化し靈の活動の力を与ふ原動力なり。經に阿弥陀仏不可思議功德とは是なり。此靈能は宇宙に遍在して精神界を靈化す。喩へば日光の万物を成化する如し。

無上道の光明は人の心靈を開きて靈氣を与へて活動せしむ。衆生は如來の理性に統一せらるるのみにあらず、其目的に協力して其理に歸すべき理性あり。此の理性の勢力に参与して活動するを菩提の心行と名づく。

無上道德的靈能―神聖と正義と恩寵との三義あり。

神聖態とは宇宙心靈には道德律の一大原則にして無上の權威あつて万法を統治し一切を約束し命令する理性の故に神聖態と見ゆ。此理性たる真理の光にして道德律を制裁するのみにあらず。一切を理性に随つて活動せしめ進化した靈化する勢力なり。宇宙

心霊しんれいの道德だうとく的てき命令めいれい的てき勢能せいのうを世よに天命てんめいの性せいに率したがふ道みちと名づけたるなり。

衆生しゆじやうの心霊しんれい開展かいてんする時ときは之これを發菩提心はつぼだいしんと為す。即ち道心だうしんなり。靈的良心れいてきりやうしんと名づく。

衆生しゆじやうの心霊しんれいが如來にやらいの一大心霊だいいしんれいと合がつしたる故に、靈憲れいそうを開ひらきて一大心霊だいいしんれいの活氣くわつきによりて精神生活せいしんせいきわつす。

一大心霊だいいしんれい無上道徳力むじやうだうとくりきは一切さいを真理しんりの軌轍きてつの中うちに動かしめ一切さいを進化しんくわし向上かうじやう靈化れいくわすべき勢力せいりよくなれば、之これに協力けふりよくするものは帰趣きしゆの理性りしやうに随したがつて進行しんかうす。之これを上求菩提じやうくぼだいと名づけ、また一切さいを摂せつして靈化れいくわに導みちびく、之これを下化衆生げけしゆじやうと名づく。

神靈態しんれいたいの光ひかりは衆生しゆじやうの心霊しんれいに自律じりつてき的に無上道むじやうだうに随したがふ良心りやうしんと現はれ、此靈的良心このれいてきりやうしんは自ら立法者りつぽふしやとしてまた司法者しはふしやとして自ら道德律だうとくりつに随したがつて制裁せいさいをなす。此が原動力げんどうりよくを如來にやらいの神聖態しんせいたいと名づく。

正義せいぎ——如來にやらい一大心霊だいいしんれいの勢力せいりよくは一切さいを自己じこの目的もくてきに摂せつして無上道むじやうだうに向上進化かうじやうしんくわせしむる勢能せいのうなり。此心霊的勢力このしんれいてきせいりよくたる自己じこの目的もくてきに協かなはざるものは之これを捨すてて之これに協力けふりよくする

ものは之を攝取す。其一大心靈の目的とは即ち麁惡を捨て眞善を選び取る。如來の選
択本願とは是なり。此本願とは一大心靈の歸趣の目的なれば之の目的に協はんと欲
せば自己の我を捨て如來の目的にしたがふ。

正義の光は惡を捨て善を取り闇を去り明を顯す。之に適するものは心靈的生活に生
存し、適せざるものは心靈亡ぶ。自己を犠牲にし如來の目的に協ふものは義として選
取せらるる故に自己（主我）を犠牲にして靈の目的に協力して行動せざるべからず。
眞善美の靈界を顯さんが為には非眞と非善非美とを捨て捨惡取善の正義の勢力に
よらざるべからず。之を選択本願力と名づく。

恩寵——如來無限の恩寵を以て常恒に一切を攝取し愛育す。觀經に無縁の慈を以
て諸の衆生を摂すとは是なり。如來一切を愛護し靈育し靈化の妙用なり。仏心とは
大慈悲是なり。無縁の慈を以て諸の衆生を摂す。また恩寵の光明遍く法界を照し
て念仏の衆生を攝取して捨て給はず。恩寵の光は一切処に遍し之に催されて正知見を

開き融合し靈化す。譬へば春和の氣候に花綻びて爛漫たる色を呈する如し。如來の愛によりて衆生の信萌を發し、心花を開き靈化の実を結ばしむ。これ恩寵なり。

如來無上の愛より方便法身法藏菩薩を發現して、衆生を救済する契機として種々苦難の相を示し、一切恐懼の為に大安を作さんが為め、一切を哀愍し度脱せん為にはたとひ身を諸の苦毒の中に止くとも忍んで終に悔ひじと。

また如來は無始無終にましませども無明によつて靈眼亡ひたる衆生の為に近く慈悲の手を垂れて、十劫正覺の身、相好円滿の身を現し衆宝莊嚴の土を現して衆生を攝取し、無上の愛を名号に表はし、聖号を称へ聖意を仰ぐときは摂せらるるとす。

又十方世界に応化の身を示し衆生を度し給ふ。釈尊の如き是なり。其教化の勢力が流行して展轉して信萌の縁と為る。斯らは如來恩寵が社会に流行したるに外ならず。

如來の神聖態は真理の光にして人の心靈を照す無上權にして道德律の光明なり。

正義は目的に契はざる私情黒闇邪惡を捨て真理の目的に協力する心靈を選び取る勢力

にして、恩寵おんちようは罪つみに亡ほろびたるものを復活ふくくわつせしむるため靈氣れいきを与あたへて靈れいの生活せいくわつに愛育あいいくする勢能せいのもうなり。この三能のうに摂せつせられて衆生しゆじやうは罪惡ざいあくの中うちより脱だつして無上道むじやうだうに向上かうじやうし進化しんくわして正覺しやうかくを成じやうずることを得うるなり。これを無碍光むげくわうと名づく。

正義せいぎは、枉まがりたる主我しゆがを捨てて直すくなる如来にょらいの定木ぢやうぎに順したがふは正義せいぎなり。其定木そのぢやうぎは神靈しんれい態たいなり。主我しゆがより解脱げだつして其定木そのぢやうぎの中うちに公正靈福こうせいれいふくの生活せいくわつを与あたふるは恩寵おんちようなり。解脱げだつは主我しゆがをすて無限むげんの靈れいに融合安立ゆうがふあんりふして始めはじて恩寵おんちようを感じかんず。

客觀きやくくわん的正義ていせいぎとは大心靈だいしんれいの能力のうりよくが自己じこの目的もくてきの爲ために善ぜんを選びえらび惡あくを棄すつるの力ちから。神靈しんれい態たいとは一大心靈だいしんれいの光ひかりが宇宙うちうにありて世界倫理せかいりんりの光ひかりとして一切さいを無上道むじやうだうに向むかはしむる理性りしやう。恩寵おんちようとは一切さいの心靈しんれいを開発かいはつして無限靈むげんれいに感かんぜしめ解脱融合げだつゆうがふし靈化れいくわして無上道むじやうだうを与あたふる性能せいのもうなり。

正義せいぎは如来にょらいの智慧ちゑの勢能せいのもう、之これに参さんずるものは自己じこを捨すて仏心ぶつしんに順したがふ。
神聖しんせいは個人心靈こじんしんれいの神かみとして自己じこの行爲かうゐを照てらす。

恩龍おんりゅうは天然てんねんの主我罪惡苦毒しゅがざいあくくどくの皮殼ひこくを脱だつして靈れいに融合ゆうがふし、有限いうげんを捨て無限むげんに、規定きていを脱だつして無規定むきていに、相待さうたいを脱だつして絶対ぜつたいに融合ゆうがふし、無碍自在むげじざいの心靈しんれい的生命いきせいめいとなりて眞實無しんじつむ限げんの靈福れいふくを感ずるかんにいたるは是恩龍これおんりゅうなり。

無 对 光

一切さいに超絶てうぜつしたる唯仏眞境ゆゑふつしんきやう、身土不二しんどふになることを無对光むたいくわうと名づく。

全宇宙心靈ぜんうちゅうしんれいたいにして無明齊むみやうはれ自性天真じしやうてんしんの靈態絶対無比れいたいぜつたいむひの眞體しんたいなり。如來にょらいの方面はうめんより觀みたる宇宙うちゅうの眞象しんしやうなり。宇宙実體本來絶対うちゅうじつたいほんらいぜつたいの靈態れいたいなれども衆生しゆじやうは無明むみやうの爲ために其その眞象しんしやうを觀くわんずること能あたはざるなり。実體絶対眞心じつたいぜつたいしんしんたい態たい、眞如しんによの體たいは如來これにょらいの境界きやうがい。

身土不二しんどふにとは絶対眞體ぜつたいしんたいは眞身しんしんにして同時どうじに眞心しんしんなり。其身そのしん即ち眞土しんどなり。身心土不しんしんどふ二なるが絶対ぜつたいなり、衆生正覺しゆじやうせうがくを成なずる時ときここに帰趣きしゆす。

眞如眞心しんによしんしんたい態法身たいほつしんと觀くわんずる時ときは宇宙うちゅうが即ち清淨すなはしやうじやう法身ほつしんとして自性天真じしやうてんしんなり。清淨法しやうじやうほつ

身しんは同時どうじに円満報身えんまんほうしんなり。宇宙うちゅう一大心靈だいしんれい、形式的けいしきてきにのみ観くわんずれば法身ほうしんにして内容ないようの智慧あち等の万徳まんとくを觀くわんする時は円満報身えんまんほうしんと為なす。法身ほうしんの体たいとして觀くわんする時は宇宙絶対理性態うちゅうぜつたいりしやうたいにして、報身ほうしんと觀くわんする時は宇宙全体うちゅうぜんたいが無尽むじんの相好さうこう光明普く法界くわうみやうあまね ほうふかいを照てらし衆宝莊嚴しゆほうしやうこんじやうの淨土どに在ましまして法身ほうしんの菩薩ぼさつを眷屬けんぞくとし雲くもの月つきを籠かこむ如ごとく其中そのなかに在ましまして説法せつぽふしたまふ。

法ほふ、報ほう、應おうは体たいと相さうと用ゆう。

また法身ほうしんは宇宙うちゅうの真体しんたいにして絶対真心態ぜつたいしんしんたい、円満報身えんまんほうしんは一切慧さいと一切能さいのうにして真体しんたいの属性ぞくせいなり。如来智慧法界にょらいちあほうふかいに遍へんす。応身おうじんは絶対意志ぜつたいいしの發現はつげんする処ところなり。

如来の真境にょらいしんきやうは高く一切さいに超絶てうぜつし唯仏ゆゑぶつ与仏ぶつの境界之きやうがいこれを十仏自境界ぶつじきやうがいと名なづく。

体たいとして云いはば法身ほうしんと為なし、即すなはち絶対真心体ぜつたいしんしんたいとして宇宙うちゅうに遍在へんざいし、相さうには円満報身えんまんほうしん大智慧光明だいあくわうみやうと四智是内容しちこれないようなり。

用いうとしては応身おうじんの徳とく、如来全能にょらいぜんのうの力ちからより無數むすうの世界せかいに諸仏賢聖しよぶつげんげうを發現はつげんして衆生しゆじやうを度どす。

無對性相。絶對如來の真相は永恒自存精神態至純至粹にして雜質を雜へず。常恒不變其量無限にして又無尽の性德を悉く顯現す。高く一切の境界に超絶し唯是如來の境、至真至善至美、真理の靈界なり。

感覺界と觀念界の兩方面。

本來絶對無限の全宇宙を衆生は感覺界の現宇宙と感見し、如來は觀念的に常寂光と觀見す。一体兩現象なり。故に法華經に衆生劫尽て大火に焚かると見るも仏陀常在靈鷲山の淨土には天人常に充滿し種々莊嚴を以て常住不變なり。三界は敗壞せらるるも我此土は安穩なりと觀ず。また我は三界の如くに三界を見ずと。また我は如實に三界の相を知見すと説給ふ。如實に知見すとは如來自境界永恒不壞の靈態なり。

靈界

絶對真理の靈界常恒不變の真態に種々の狀態によりて種々の名あり。常住不變の

靈界なれば常寂光と名づく、寂は理にして光は智なり。靈界は唯真理と智慧の態なり。全体大智慧光明の故に智土と名づく。是らは智力と理性として見たるなり。感覺的には妙色莊嚴至美の靈態なれば之を淨土と為す。感情的に自然微妙の快樂と靈福のみなるが故に極樂世界と名づく。作意的意志を超絶したるが故に無為涅槃界と稱す。此感覺的には見聞を超絶する深秘の故に密嚴世界と名づく。最高徳と最靈福とのみの故に最幸の安樂國と名づく。重々無尽の具徳の故に譬喩的に蓮華藏世界と名づく靈界を表明する名詞甚だ多しと雖ども其体は一なり。

宇宙の真相は如來は常恒不變真理の相を觀る、吾人は仮相のみを知見す。カントの叡知世界とは是なり。吾人の感覺せる理象界とは一体の異象なり。衆生は無明により眞に背き塵に向へるが故に真理の真相を知見すること能はず。法身を体とするに拘はらず父子永く相乖離するは蓋し無明の覆ふ所なり。無明悉く尽きて如來に歸入する時は無碍靈態顯現し本覺ここに顯はる。無明の夜明て迷の眠り覺めて初めて此眞境

顯現せん。この境界を無対光と名づく。六道及二乗の境界に非ざる故に無対光と名づく。是如來の積極的方面なり。之を覆ふ所の無明等の一切の垢質を脱却する勢能即ち消極的の方面を炎王光と名づく。

炎王光——衆生の惡素質を脱却する能力——

衆生は絶対理性の一員として仏性伏藏すると同時に自然の無明等の真理を覆ひ靈性を障ふ処の垢質具有す。之を脱却するに非ざれば真理の靈性顯現するに由なし。この障害物を脱却する勢能を炎王光と名づく。此光は上述の法般解の如來靈知靈能の徳用なり。此三大の徳性は宇宙心界に充滿して衆生の三障を照破す。譬へば日光の闇を破し万物を成化するが如し。無対光は積極の靈性を顯はし炎王光は消極の惡質を脱却す。三障とは惑と業と苦との三なり。

無明は根本的の障り、無明によつて真を失ひ幻塵に向ひ、主我を執し利己的の肉慾

と我慾とを發す。

無明とは明を失ひ真理に背き闇に向ひたる一念とす。真如無始の故に無明また無始なり。同一の体の一方より見れば無明にして一方より見れば明態なり。吾人は無明の方面に迷つて塵に向ひ感覺界を真実なりと謂へり。四顛倒を起して真に惑ふ。この罪惡の潜伏するを惑と名づく。是が顛動態を業と名づく。知力の惑を見惑と曰ひ生理根本惡を思惑と名づく。見は身、辺、邪、取、戒、貪、瞋、痴、慢、疑を云ふ。思惑は營養生殖等の慾には情に適へば貪り之に反れば瞋る等なり。また忿、恨、覆、惱、嫉妬、害、憍、等の眷屬の惑あり。罪の情操のあるを惑と曰ひ顛動態なるを業と名づく。即ち罪過なり。主觀的の惡を邪とし客觀的の惡を惡と名づく。邪惡とは道德に背反する性質にして無上道の客觀的理性を顯はすに抵抗する状態なり。即ち殺、盜、姪妄、貪、戾、恚、恨、憍、慢、妬、忌、また八邪六弊等の所作を惡と名づく。自佗の精神及び自体の生活に害をなすものなり。斯る情操と行為とは聖意に乖戾するものと

して排除せざるべからず。

苦とは身と心とに感ずる処の苦惱なり。生、老、病、死、愛別離苦、怨憎会苦、五陰盛苦、求不得苦等なり。

衆生には此三障自然に俱有して譬へば寶石に垢質ある如し。此三障を脱する時は靈性顕現すべし。三障は三仏性を覆ふ。

罪惡に俱生と分別起、即ち本能的なると發展するものとあり。俱生は天性生理的自然的惡にして動物通性の惡本能に育得す。分別起とは主我發展して本能に育得せず。我慾及び肉慾の發達したる性我慾榮利を貪り權威を求め佗を压倒して自己の慾を逞ふす。我に反すれば非理に怒り、或は斷見を起し、邪見より真理を非り、因果を謗り、甚しきは即ち病的の惡をなすに至る。

この三障を脱却するは炎王光の力なり。真理と靈知靈能の徳として遍在す。人主我の非をさとり如來に歸して之を脱す。

この脱却するは行儀門に属す。

心理感応門

清浄光等の四光は人の心機に親しく交感すべき靈性なり。人は此聖靈の感応によりて仏知見開發し聖靈に化せらる。即ち得道するなり。法華に如来一大事因縁を以ての故に世に出現し給ふと。因縁とは因は衆生に伏せる仏性なり。縁とは如来無限の靈性、この感応によつて人の仏性を開發し靈化する靈能を清浄光等の光明とす。譬へば太陽の光によりて闇を照し万物を化育するが如く、如来の恩寵能く衆生の心靈を開示し靈化す。如来の真理と靈智靈能とが衆生に及す徳を恩寵と名づけ、衆生が如来に對する至心と信樂と欲生との三心を概して信仰と云ふ。此三心が如来の三大に感応す。此感応によりて解脱し靈化するを心理感応門と名づく。また人の心理が感覺感情智力意志との四機能に對する如来の四光なり。如来の靈光は本来無限普通性。人の

心理に感ずる限りに於いては特別なり。此の感応の限りに於て靈応と名づく。キリス
トの所謂る聖靈なり。

清 淨 光

感覺を美化し八面玲瓏感性清淨なるを清淨光と名づく。心理感覺作用は人と
外界との關係が生理的の感官たる視聴嗅味触に感覺する作用なり。人の天然の感
官は見聞悉く心情を染汚するが故に感覺客觀を塵境と名づく。外物本淨穢なし。
但自己の感覺作用に感ずるのみ。然るに天然を超越して靈に入つて靈と交感するとき
は感性美化するが故に五官の感ずる処一層清淨にして清淨皎潔なり。

元來宇宙の真相は淨に非ず穢に非ず元來如來清淨界なり。然るに衆生無明妄業
力によつて現象の感覺界を感ず。例へば赤色鏡万物赤色を呈する如く、人間の視官
に感覺し聴官に感覺する処など万人同一の感覺なる故に物自身全く是の如きものな

りと謂へり。其実自己の感覺作用より感ずる処に外ならず。若し感性をして美化する時は客觀界自ら清淨の靈界と現ず。

如來の清淨光によつて交感し美化する時は靈體發現し天地一新感性清淨なること例へば瑠璃瓶に精金を盛る如く六根清徹して十方に映現す。眼に衆色妙莊嚴を感じ耳に微妙の音聲を感じ鼻に至美の妙香を薰じ舌に上妙の味を感じ身に自然の妙觸樂を感じ。感性清淨なるが故に見聞の境として微妙皎潔ならざる処なし。法華經に六根清淨なる時は十方一切の色声香味觸法として悉く微妙至美ならざるはなしと説けり。自己の主觀の美化を求めず單に客觀の淨土を求むるが如きは甚だ仏教の意にあらず。如來清淨光にて衆生の心靈を化するが故に其美化する感性を以て觀ずる時は境として悉く清淨ならざるはなし。自己の主觀の美化するが如來の清淨光の功能なり。現に美化する時は現に六根清淨を感じ、後此肉身を脱する時は純粹清淨國土を感じべし。宇宙本如來靈界なるが故に本より清淨なり。但し衆生

の感性かんせいの垢質くしつ脱だつするとき始めて洞然とうねんとして十方じふ悉しつく清淨じやうじやう微妙みゆうなりと感かんぜん。また浄土じやうどの依正二報えしやうの美界びかいを感かんぜん。然しかる故ゆゑに古人こじん曰いはく塵々じんじやう極樂ごくらくと。この感性かんせいを化くわする処ところの性能せいようを清淨光じやうじやうくわうと名なづく。

歡 喜 光

感情かんじやうを融合ゆうがふし靈れいに安立あんりふし靈福れいふくを感受かんじゆせしむるを歡喜光くわんぎくわうと名なづく。

感情かんじやうとは人の心理作用しんりさようの中に苦樂くらくを感かんずる精神作用せいしんさようにして喜怒哀樂きどあいらく愛憎あいさうの如ごときは之これを感情かんじやうと名なづく。人の心理活動しんりくわつどう中最感さいかんの度の強つよきものなり。人の天性てんせいは苦惱くのう恐怖くふ憂惱ゆうのう多おほし。其本天性そのもとてんせいとして幸福かうふくを求め感覺かんかくの快樂くわいらくを追求つひきうするも幸福獲得かうふくくわくとくし難がたく苦毒くどくを感かんずること多おほし。是自己これじこの天性てんせいの幸福主義かうふくしゆぎが致いたす所ところなり。宗教しうけう的感情てんかんじやうには罪惡ざいあくの多おほき感かんぜず。胸中きやうちうの毒蛇動どくじやうもすれば憤惱ふんのうして毒氣どくきをはき、忿恨ふんこん妬忌どき詭曲てんごく曲橋きやうまんとう慢等ざいあくきやうの罪惡胸ざいあくきやう中ちうに潜伏せんぷくし其刺激そのしげきに随したがつて激昂げきこうし顫動けんどうす。自己じこの罪惡ざいあくを嫌忌けんきして如来にょらいに帰命きみやうし、一た

び転じて如来の靈海に歸入する時は、無限の愛に融合し、歎天喜地、如来真我の中に投じて主我没亡し、入我々入、如来真我の中に我あるを認む。是よりは常に情操如来の靈に安立し平和安穩にして新鮮なる活氣に養はれ靈福を感じ歎喜に充さる。經に如来斯經を説給はんとする時諸根悦予し姿色清淨にして光顔巍巍たる靈相を示したるは内全く如来の靈に充たる内容が表に現れたるなり。仏陀は常に眞の如来の無限の靈に安立するが故にいかなる逆境に遇ふも姿色変ずることなきはたとへ肉身に苦惱あるも内容の靈福の強きが故に外部の苦を感じざるなり。故に感情は無限の愛を全く感ずる時は外部の苦は敢て苦とするに足らず。深く内容に感受すべき靈福の原動力を歎喜光と名づく。

智 慧 光

仏知見を開き聖靈を啓示し眞理に悟入せしむるを智慧光と名づく。

知力とは差別を知るを云ふ。普通知力とは現象界の万有を理解し弁別する等の知的作用なり。今いふ智とは正知見を開きて如来真理の性を悟達し証入する処の知力にして即ち如来の真身と心等を知見証知する能力なり。

人の天性は無明の垢質ありて本より如来の真身心中に在りながら未だ真相を知見する能はず感覺界のみを認識す。

如来の身心は一大靈態にして、身とは体なり、心とは象なり、即ち絶対精神と及び一切慧なり。

如来は法界身入一切衆生中とは如来の一大心靈中の衆生心靈なれば各々の個人の心靈の窓を開く時は個々は譬へば一大空間の中に在る窓を開く時の如し。

如来の靈に感じ正知見開發する即ち心眼開く時は如来の身土を觀見することを得。是を三昧定中の觀見と名づく。また聖靈に感じて真理を啓示せらると名づく。所觀の境相を三種と為す。

一に感覺的証明——人三昧中に光明相を見、また華を見、仏の形相を感見す等、
觀經十三觀、淨土の七宝莊嚴の土即ち瑠璃宝地光明徹照して宝樹には金華玉葉の光
を放ち八池水は金沙徹照して水なきが如く等、また如来真金色にして八万の相好あつ
て光明を放つ等、感覺的に觀ずるを云ふ。

二に写象的啓示——如来は四智、大円鏡智円かに法界を写象し、平等性智自觀的に
其理性は一如なりと觀じ、觀智が如来の内容を示す等。また如来は大慈悲心なり、大悲
大喜大捨即ち是如来心なりと觀ず。

三に法身觀——如来の真身心は是法界身なり。宇宙実体是如来心身なり。土が即ち
自身にして、心身心土本来一なり。之を法身觀と名づく。自性天真、言思に超絶す。
唯証のみあつて相應するを実體觀と名づく。

三昧に入つて如来の大觀と相應し夫よりは無量の總持を發得しまた無生忍を証得す
等の真理を証得するものは悉く是如来智慧光が人の心器に發現するものといひつべ

し、之の能応を智慧光と云ふ。

昔し廬山遠大師定中に聖相及び瑠璃宝地八池水等を觀じ、また天台の顓大師法華三昧方便に靈山一会未散の相を感じ、而して後ち總持を發得すと。唐の導大師定中に淨土の莊嚴を觀じまた百八の聖相現じて啓示す。法然上人は聖相を感見すること常なりとの如きは是れ啓示なり。釈尊伽耶の道場地にあつて朗然として大悟す等。

不 断 光

意志を靈化し聖道徳心を發し無上道に進趣せしむるを不断光と名づく。

意志は人の善惡の意向また性格にすべての行為を指導する處の精神作用なり。人の天然の意志は主我幸福主義また世俗的情操にして名譽權威榮利を欲望する等意志甚卑劣なり。如來の聖靈に化する時は、消極には從來の世俗的利己的の劣態罪惡の狀態を脱却し、積極には聖靈同化の徳たる至善心即ち菩提心となる。菩提心とは如來の一

大心靈と聯絡する靈性にして上は心靈益々進化して如來の聖性に靈化せんことを欲み
向下としては一切の人類を愛護して自己と同化せんことを望む。

如來の靈に化する時は一切衆生本同一理性なるを知るが故に博く衆を愛すること自
己と同じく、また如來の靈性に化せんとする時は自己の性惡を憎惡して之を脱却せん
ことを望み、ますます向上進化の爲に努力し聖子たるの天職を尽さんが爲には犠牲の
精神を以て力行す。

如來の靈性に靈化せんには須らく完徳の鑑たる釈尊に倣ひて即ち慈悲温和智慧正義
堪忍剛毅謙遜貞操熱心等を体して自徳を莊嚴す。しかしながら是如來の靈たる常恒不
断の靈光が内に在つて意志を指導し良心を照して、而してここに客觀的の言語動作
に顯動するに至る。

佗に對しては同一理性の衆生なれば衆生の病即ち自己の病として之が救療を求め
実意を尽して財施及び法施無畏施を与へ、彼も同じく如來の愛子なれば之に對する

愛語を以てす。菩薩は大道心同一の故に其事を同じふす。すべて利を与へ益を頒つ、即ち自己の利なれば利行と名づく。

十善八正道六度四摂等の情操及び行為は是菩薩の行ふ処なり。其行門無量なりと雖も菩薩の三聖淨戒に摂すべし。

一に摂律儀戒。行為と言語と思想との三業に於て行ずる処の一切の非惡を自律的に制止して作さざるを云ふ。

二摂善法戒。積極的に一切の善を作す慈悲温和等の六度の行為はまた自律的にして如来の靈性に氣呵せられて發動する処の無上道德的の行為を云ふ。

三饒益有情戒。布施愛語同事利行等の法を以て佗を博く愛して如来同一理性の中に於て一切衆生自己との差別を見ず同一の心を以て衆生を饒益するを云ふ。

如来の不斷光によりて常恒不斷に氣呵せられて心靈を刺激す為に自律的に一切の非を制止し一切の善を發動す。而して自己に止らずして一切を利益することを得。

如来の聖靈に化する道德的靈性多しと雖も三心を本とす此三心のみよく如来の一大心靈に合す。

一に至誠心。誠の至りとは自己の源を尽して如来の聖靈と合一す。一大心靈に契合するが故に至心は一大心靈を個人としたる心靈なり。故にこの至誠心より發動する意志は聖の心靈の發現なり。如来は真理なり此靈化の光自己を照す時は惡として廢せざるなし善として行ぜざるなし。

二信樂。如来を深く信じ深く愛するなり。真理なる如来を信ずるが故に自己の不真理を信じて之をゆるさず。如来を愛するは即ち真理を愛するなり真理を愛する故に自己の非真理を嫌ふ。此信と愛とによりて如来の愛子たる衆生を愛せざることなし。之を信樂と名づく。

三欲望。靈的欲望即ち終局の目的たる聖靈に帰することを欲むなり。是の最も至善最頂の欲望ある時は野卑の情欲発するに由なし。欲望にして高等なる時は一切の意志

を導きて至善に進趣す。至善に向上する衝動をこの欲望と名づく。この三心は是如来より出で如来に帰するの光なり。故に具せざるべからず。

行 儀 分

難思光等の三光は宗教行儀門とす。即ち宗教起行の過程にして、初め宗教心の喚起より、終り信仰の結果たる実行に至るまでの宗教意識の過程を三階級とす。即ち三期に分つ。初に信仰の喚起、二開展、三実行なり。

上巳に心理感應門に於て如来の靈応たる恩寵によつて感化せられたる人の心象を説明せしも、いかに宗教意識を修養し発達せしめて開展し靈化することを得んか。是倫理即ち行儀門を説明せざるべからざる所以なり。

難思光——行門第一期信仰喚起位また資料位

甚深にして初發意の輩難解難証の故に難思光と名づく

宗教心の第一期なる恩寵を喚起する時代にしてまた資糧位とも称す。即ち恩寵を喚起し修養することなり。

恩寵の喚起には因と縁と相待たざるべからず。因とは人の宗教的衝動。人は天則の理性として靈性潜伏す。是を仏性と名づく。仏性は土地が種を播布する時は之を長養する性能あるが如く、仏性の聖種子を下すべき素地となる。是が要素即ち聖種子を下す時は仏性薫発す。經に仏種縁より起るとは是なり。

人は元祖先より幼稚ながらに恩寵素地ありて已に之が素地を作れり。之が宗教的衝動と成りて来れり。此内に法爾として靈性潜伏せるが故に無限の靈性たる如来に對して憧憬となりて客體の靈態を恋仰す。如来不可思議の靈徳を開くや切に欽仰心を惹起し神宗を憧憬す。これが客體を難思光と称す。

難思光の名義。難思とは不可思議の義なり。実に如来甚深の境界は測り難し玄妙に

して遙かに自然界に超絶して人の自然認識すべきに非ず。是を唯仏与仏の境と名づけ、聖賢も其実底を測ること能はず。況や初発心に於てをや。唯仰いで信すべきのみ。故に難思光と称す。

斯る自然に超絶する甚深の靈界は難入難解唯実践理性即ち実行に於て初めて帰入証明することを得。いはゆる方便を以て証入することを。初め恩寵の喚起は經に若し人ありて其光明の威神功德を聞て日夜に称説して至心不断ならば意の所願に随つて其國に生ずることを得と。

光明威神功德を聞くとは、上に説く処の如き如来の無上靈徳を聞く。名によつて聖徳を詮表し、名によつて其実体を思念し觀察し日夜に称説す。

宗教心を修養すべき之が資糧となるべき五種聖行あり之を正行と云ふ。

一、礼拝正行。正しく朝には至心に拝礼し如来無上權威と恩恵とに帰命し自己の言と思と行とを捧げて靈を養ひ聖旨を現はすべきつとめを以て礼し、昏には如来の靈

光によりて一日つとめ来りし三業の行為のいかなりしやを吟味し其過を悔ひて至心に靈性の養を祈る礼拝にて、自己の傲慢等の惡徳をくじき靈感をいのる。

二、誦誦正行。三部等の聖經をよみて靈眼を開き靈性を養ふ。聖經は教祖が自ら靈感せる内容を詮表したるものなればよく之を信解し如法に実行する時は心靈の料となる。聖靈の糧を廃して心靈豈活くべけんや。

また聖經は靈界の甚深神秘の奥を洩せり。之を読み如実に修行するときは秘密の神界を開く靈鑰となる。是れ靈を養ふ資料たり。

三、觀察正行。如來甚深の境界は玄妙難思遙かに感覺を超絶す。冥想觀念凝神熟考して靈眼を開かざるよりは窺ひ知るべきにあらず。神秘の室に入て聖靈を感じんと欲せば須らく三昧門を修すべし。導師曰く。一ら靈相を觀じて常恒不斷に失意聾盲瘖啞痴人の如くならば此定得易し、若し然らざれば千年を経とも法眼開くこと得ざるべしと。至心に一ら凝神して相好光明慈悲智慧等を觀念して心靈を養ふべし。

四、称名正行。

如来の真相は甚深玄妙にして思議に超へたり。聖名を以て其徳

を詮表するにあらざれば表し難し。故に一ら聖き名を称へて聖旨の自己の心霊に現れんことを祈るべし。無上の尊敬と無限の恩寵を感謝して如来の摂取を仰ぐ。一ら常に聖名を称へ自己を投じて霊海に帰入するときは念々悉く如来薩婆若海に流入す。日夜不斷に靈感を祈つて靈性を養ふべし。

五、讚歎供養正行。

如来は無上の靈にましまし無限の愛にましませば全く心を尽く

言を尽して讚美すべし。新しき聖き頌をもて靈徳を讚し至真至善至美の徳を称へ真理の光と無上の智慧と靈能の徳を称へよ。思と言とに於て讚美するのみにあらず、聖旨の現はれんように実行し如来の光栄を顕はす是讚美の実行と謂つべし。供養とは珍膳美饌及び香花奏楽も自己の至誠を表はす供養に外ならず。然れども眞の供養は己が心を捧げ身命財を犠牲にして如来奉事的事業をなすは是供養の中の真意なり。至心に讚し供養以て心霊を養ふべし。

此の五種聖行は心靈を養ふ処の要素にしてこれ靈性を養ふ靈糧なり。

至心とは至誠信樂欲生の三心なり。至心に深く如來を信じ愛し其世つぎたらんことを欲望す。此三者一を缺ぐも不可なり。

不斷とは修養の用心自己の意志を献げて專精ならしめ終局に到達すべき規矩たり。

一、恭敬修。如來の絶対無限の真に合せんには自己の主我を捨て一に帰命信賴せんには如じ。無上の威權なる如來に對し無上の尊敬を呈せざるべからず。是れ全く如來の神聖正義恩寵に對する意思を表す。古人常に西方を背にせず西に向て合掌恭敬を表すと。想を西に傾けしめば念々自ら如來の靈海に歸入す。

二、無余修。唯一の独尊に歸して一ら礼し一ら祈りまた觀念し讚美し供養して自余の神及仏に歸せず。眞の如來の外に全く一切衆生を攝取し靈化する權限あるものならざればなり。また意志一なるは心靈なり。心靈は如來の一大心靈と聯なり、心靈は金剛の如く動ぜず變ぜず。

三、無間修。

無余は空間的に專一を守り無間は時間的に變動せずして一貫するなり。意志無間に一貫する時は如来の靈を感じず。人初めは雜念にして暫く如来を感じるも忽ち消失す。一たび開きて真に入る時は始終一貫任運無作にして自ら靈なり。然れども未だ喚起の期節なれば作意的に如来を念じて捨てざることを要すべし。

四、長時修。此四修は初め発心即ち恩寵の喚起より実行の終りに至るまで常恒不斷の注意的作用にして三心五正行を以て不斷の過程に作用して遂に於て廃止せざるを要す。故に長時修と名づく。如来は無上にしてまた無限の靈態なり。之が中の進化向上の過程なれば必ず策進して中止せざるべし。

亦仏教に五根五力の規ありて是れ靈性を養ふ材料なり。

如来の性徳を聞て之を要素とし即ち聖種とし五根を發生す。信じて疑はざると、一ら專精に進策すると、憶念して忘れざると、一心決定して動ぜざると、能く真妄を決して惑はざるを信進念定慧の五根と云ふ。此五法が益々發達して動揺せざるを五力

と名づく。此五法よく靈性を養ひ發達す。

無称光

——信仰第二期、恩寵開展

深秘内容唯自証知言説をもて顯示する能はず。無称光と名づく。

已に如來の靈により三心四修五正行をもて信仰心を養成す。聖經を読み晨昏の拝禮十分自己の從來の惡素質を脱却し内容益々發達し已に純熟し心機開展するを加行位と名づく。心機開發すべき規則を七覺支と名づく。

資糧位の五根五力をもて心機を修養し五力にて發達し進んで七覺支となりて心華を開發せしむ。

- 一、**拏法覺支**。專ら意を一にし佗の雜念を捨て一に如來の靈性を得んことに專注す。
- 二、**精進**。勇猛專精に靈に進趣して止まず。意志勇敢にして專精にして関門を突貫せんとす。

三、喜。三昧に入らんとする予兆として身心悦予を覚ゆ。

四、輕安。一心は靈に乗ずる故に輕く、心靈なるが故に身安穩を覚ゆ。

五、定。一心の波浪已に息み湛然たる三昧心水に聖靈の月宛然として感應し、ここに於て心華初めて開きて靈応を感ず。神秘の門を開きて神靈の内容を知見す。之を仏知見開示とす。八面玲瓏歛天喜地、この時に先驅として感發するものは明相日輪の如くまた星の如くに徹照し、或は瑠璃宝地を見、又満月の妙容を觀る等、是心理の正知見に相當す。

六、捨。初めて三昧に入らんには一心勇猛に一ら意志を注集して入ることを得。然るに久しくして純熟するときは任運無作にして自ら靈と相應する故に捨と為す。即ち任運無意識的の義なり。

七、念。已に靈應に感化して後は意志の發動自ら靈ならざるはなし、故に念覺支と名づく。

心情しんじやうには如来にやらいの中に融合ゆうがうす。楞嚴りやうごんに、聖胎せいたい已に成じやうじて如来にやらいの靈相れいさう心中しんちゆうに成じやうず此時このときの歡喜くわんぎ言語げんごに堪たえたりとは心情しんじやう融合ゆうごうしたる状態じやうたいなり。此心象門このしんしやうもんの歡喜くわんぎ光くわうによりて感情かんじやう融合ゆうがうし安立あんりふする時に相当さうたうす。無称光むしやうくわうの名義めいぎは心開發こころかいほつしたる融合ゆうがうの對象たいしやうを無称光むしやうくわうと名づなく。如来深秘にやらいしんぴの内容ないようは玄妙げんめうにして思慮しりよに超絶てうぜつす。然しかるに実行理性じつかうりせいなる心機しんき開發かいほつし三昧さいまい定中ぢやうちゆうに靈れいを感じ神秘冥合しんぴめいがふの状じやうは冷暖自知れいなんじち、唯自たゞみづから証知しやうちかんち感知かんちするのみにして、言語げんごを以もつて其実意そのじつい即ち真味しんみを詮せんして佗たに感知かんちせしむる能あたはざるが故ゆゑに無称光むしやうくわうと名づなく。初期しよきには難思光なんしくわうとは初心未だ証入しよしんいましやうにふせざる時は思慮分別しりよふんべつの及およばざる処ところなり。第二期だいきには已すでに開かい覺かくして靈れいを感じずる時は自ら其真味そのしんみを感じ悟入ごにふす。然しかれども称說しやうせつして他たに示しめすべきものに非あらず。故ゆゑに無称むしやうの名なあり。

ここに到いたつて未曾有みそうの妙象めうしやうを感じ仏知見ぶつちけんを開ひらき真相しんさうを悟入ごにふし情操じやうさう一転てんし如来にやらいの中に安立あんりふす。

主我亡しゆがもうじ如来にやらいの個人こじんたる自己じこなるを意識いしきす。意志いし一變いへんするを更生かうせいと為なす。理想りさうの往わう

生なり。是は五位の中の信と住とに相当す。知見を開きて如来の真理を証明し信忍して疑はざるに至るを信位と名づけ、情操如来真我の中に安住して主我を脱し意志一転するを住位と為す。

超日月光——第三期、実行

正知見を開き仏の正道に入る向上行、超日月光と名づく。

宗教の結果は実行にあり。正に情操一転し更生しぬれば如来に靈化せられたり。正知見を啓示し情操一変して如来に安立し從來の主我幸福主義を脱してよりは如来の目的に協力して如来の個人として活動せざるべからず。

如来の神聖正義の日月は心靈を照す光明となりて良心として自己の一切の意志を支配し肉慾我慾等の卑劣の情を降服し終局真理の目的に向て行動す。向上の道には神聖すなは無上權威ある光を以て良心を照し主我を犠牲にして如来の指導に力行するは是正

義なり常に意を注いで邪惡を捨て正善を選ぶ。此光明は人の心靈を向上進化せしむる動機なり。

謙遜、温和、忍辱、正義、剛毅、勇猛、力行、一心、智慧、慈悲、貞操、等を体して己を莊嚴し、四摂四弘誓願を志願とし、所謂如来の一切衆生を救度し如来の正義を承けて自己及び一切衆生の罪惡の情操及び行為を断除し、如来の一切慧の中に一切の法門を学知し、如来無上の大覺位に自己及び一切の同化せられんことを望みとす。此志願を充たしめんが為に如来の聖意の実現せんことを祈る。聖意の実現とは即ち六度四無量。大慈は衆生に安寧を与へ、大悲は衆生の憂苦を拔済し、大喜は衆生に眞理による喜を与へ、如来無限の聖意を他に施し、四摂を以て衆生を摂受す。

超日月とは如来の靈により人の心靈を開き靈眼を開かしめ靈化の意志即ち心靈的道的徳的行為をなさしむる勢能なり。如来の神聖は無上権ありて衆生をして犯すべからざる光を与へ、正義の光は自己及他人の邪惡を捨て正善を選び取り、慈悲は罪に亡びた

るものを無限の愛によりて復活せしめ、靈に入ることをうる者はこの愛を体してすべてのものを愛するに至る。此神聖正義恩寵の三徳は人の心靈を開き靈の活動の元氣となる。喩へば日月の光によつて明をなしました万物を生育する如く、如来の靈光は人の心靈に明を与へ靈化の徳を与ふ。故に超日月光と名づく。

更生即ち心靈的生活に入りてよりは一時の更生に非ず。常恒不変の過程にして十善八正、六度、四摂等の行を以て無限に向上進化せざるべからず。

